

## 疫 学 班

班 員	山 下 文 雄 (久留米大児)
研究協力者	田 崎 考 (佐賀医大児)
	白 幡 聡 (産業医大児)
	福 重 淳一郎 (九州大児)
	村 松 和 彦 (福岡大児)
	辻 力 (佐賀医大法医)
	古 屋 義 人 (産業医大法医)
	永 田 武 明 (九州大法医)
	原 三 郎 (久留米大法医)
	吉 村 健 清 (産業医大臨床疫学)
	斉 藤 友 博 (産業医大公衛)

### 研究目的

1. 北部九州におけるSIDS剖検例の検討
2. 死亡統計からみた乳幼児突然死の実態
3. 福岡・佐賀両県下における疫学調査

### 研究結果

#### 1. 北部九州におけるSIDS剖検例の検討

今年度の疫学班の目的の1つは、正確なデータを得るために剖検例をできるだけ集めたいということである。近年、SIDSに関する世の中の関心が高まってきており、行政解剖がない北部九州では、急死例の司法解剖、病理解剖の数が増加してきている。

この1年間に班員のところに集まったSIDS症例は総数9例(表1)で、剖検例は8例(法医6, 病理2)と非常に多かった。発生年度別にみると58年が1例, 60年が1例であと7例が59年度であった。男女比は男児6, 女児3とやはり男性が多かった。死亡時年齢は1カ月から1才8カ月で、平均6.7カ月であった。住所では都市部が6, 地方が3であったが、人口比などをみると差はないと思われる。発生場所をみると自宅4例託児所等が5例と、自宅以外が多い。前に新聞等で問題にされたように、託児所等の死亡例が剖検されていることが多いと思われる。発生時期は3~4月が5例, 12月~1月が4例と割合集中して発生している傾向がみられた。発生時間は一定していないが、

その時の状態は不明と記された3例を除いていずれも睡眠中となっている。母親の年齢は一定していないが、同胞との関係は1人子を除きすべて末子となっている。

剖検は、異常発見後、短時間でも蘇生できたグループは病理解剖となっており、そうでない例はすべて司法解剖となっていた。解剖所見は病理と法医で形式的ではあるが若干の差がみられ、SIDSとして今後検討する必要があると思われた。

症例9では、昭和60年1月に次の子供ができていた（佐胎41週、出生体重2940g）が、両親がSIDSの発生を心配し、夜間消燈せずにごす状態がつづいた。3月よりモニターをつけて経過観察して、後日詳細を報告する予定である。

## 2. 死亡統計からみた乳幼児突然死の実態

乳幼児突然死症候群（SIDS）の発生頻度を調べるには、いくつかの方法が考えられる。

- 1) 臨床医が経験した症例を集める。
  - 2) 司法、病理解剖より集計する。
  - 3) 死亡統計より突然死例を集める。
- 1) の方法は、我々が前回の研究班において、医師会の協力を得ておこなっている。この方法の問題点は、すべての症例を報告してもらえるかということである。我々のアンケート調査でも報告率が高い地域で56%の回答率であった。しかも、回答なし＝症例なしといえない点がある。さらにまた、まだSIDSになじまず、急性心不全や窒息などの診断名になっているものを、どうあつかってもらえるかという問題もでてくる。
- 2) の方法は、本報告の前半でのべているように、今回の1つのテーマであった。研究班成立とともに世の中の関心が高まり、剖検例が次第に増加傾向にあることは望ましいことといえる。しかし、行政解剖が九州地区では全然なく、司法解剖も家族からの問題提起によってのみされており、医師、警察側からの解剖例はないようである。家庭内あるいは親しい所での急死の多くは、病死として届けられていることが多いのが現状であろう。
- 3) 1) 2) でおちている所を補う方法の1つとして死亡例からの集計が考えられる。

表2は、昭和55年度のS県の死亡統計から乳幼児の死亡を原因別にまとめたものである。1カ月未満の死亡では、未熟児関係および先天奇型による死亡がほとんどであるが、1カ月以上1才未満では、先天奇型について感染や事故死が多い。1才以上2才未満になると感染、事故死がほとんどとなる。

突然死に関係あるものは、1カ月から1才未満に集まっていた。診断名として、急性心不全（発病後短時間で急死）、タオル、毛布、うつぶせ等による窒息死などであり、SIDSとなっているのが3例あった。

S県の年齢別人口より求めた死亡率が表3である。

前述の急性心不全、窒息（この中には異物誤飲等による窒息などは除外されている）およびSIDSの三者を急死と考え、急死率をみると、1才未満0.71（男児0.91，女児0.50），2才未満では0.35（男児0.46，女児0.24）となり、前回報告したS県のSIDS発生率0.03よりはるかに多く外国の報告に近づいてきている。ただし、これらはすべて剖検がおこなわれていないので、急性心不全の2例，窒息の4例については他の疾患名がつく可能性もある。今から死亡時の状態を調べるには、すでに5年も前のことで、はっきりさせることは難しい。

SIDSの疫学を考える場合、米国なみに剖検診断によることが望ましいことはいうまでもない。しかし、行政解剖が全然おこなわれていない地方では、急死例のすべてを病理又は司法解剖をおこなうことは至難の技である。できるだけ、剖検にかわるデータを得るためには、死亡例をできるだけ早く知り、死亡時の状態をくわしくつかみ、突然死との関係をもとめていくことであろう。

### 3. 福岡・佐賀両県下における疫学調査

前回の両県下のアンケート調査をもとにして、再びおこなう予定である。別紙のような依頼状で、両医師会の了解を得ており、4月早々にはおこないたいと思っている。

このアンケートによっても、調査もれを防ぐ意味で死亡小票の利用もおこないたいと考えて、本研究班長を通じて厚生省に依頼状を提出している。

この両者に、剖検例を加えて検討をおこなうことにより、北部九州のSIDSの疫学はかなりはっきりしたデータを得ることができると考えている。

表1 SIDS症例（昭和58年度：N=1，59年度：N=7，60年度N=1）

剖検例：N=8，非剖検例：N=1

氏名	性	死亡年齢	住所	場所	月日・時間	状態	同胞	母の年齢	剖検
Y.O.	男	2ヶ月	直方市	保育園	58.12.23am 9 (一旦蘇生後 pm 2 死亡)	不明	1/	26才	あり (飯塚病院一九 大病理) 肺出血
F.K.	女	4ヶ月	田川郡	託児所	3.13pm 2	不明		29才	あり (久留米大) 肺に11型の所見
H.K.	男	8ヶ月	北九州	自宅	3.16pm 1	睡眠中	2/2	29才	あり (産業医大病 理)
T.K.	男	1才8ヶ月	福岡市	ベビーハウス	4.6 am 7	睡眠中		21才	あり (福大法医)
K.U.	男	4ヶ月	大野城市	ベビーホテル	4.9 pm 1 : 30	睡眠中	1/1		あり (福大法医)
K.W.	女	11ヶ月	浮羽郡	託児所	12.3 pm 4	不明	2/2	23才	あり (久留米大) 検索中
M.T.	女	8ヶ月	北九州	自宅	12.17am 6	睡眠中	4/4	40才	あり (福大VSD) SIDS?
K.M.	男	1ヶ月	嘉穂郡	自宅	60.1.30am 8	睡眠中	1/1	20才	あり (久留米大) 検索中
剖検がないが、臨床的に広義のSIDSと考えられるもの									
S.T.	男	2ヶ月	福岡市	自宅	4.8 am 10	睡眠中	3/3	31才	なし

表2 昭和55年 S県死亡例

年 齢	1カ月未満	1～12カ月	1～2才	計
低出生体重児	25	1	0	26
無酸素症	8	0	0	8
出血	5	0	0	5
心疾患	7	12	1	20
奇型	2	4	1	7
感染症	1	7	5	13
溺水	0	1	6	7
事故	0	2	3	5
急性心不全	0	2	0	2
窒息	0	4	0	4
SIDS	0	3	0	3
計	48	36	16	100

表3 昭和55年 S県乳幼児急死率

年 齢	0～1才未満	1才～2才未満	計
県人口	12,601	12,795	25,396
男	6,590	6,536	13,126
女	6,011	6,259	12,270
死亡数	84	16	100
死亡率(1,000人比)	6.67	1.25	3.94
急死数	9	0	9
男	6	0	6
女	3	0	3
急死率(1,000人比)	0.71	0	0.35
男	0.91	0	0.46
女	0.50	0	0.24

医師会長 殿

昭和 年 月 日

厚生省乳幼児突然死の疫学的研究  
分担研究者 久留米大学小児科  
山下文雄

乳幼児突然死の分類

全く予測できなかった乳幼児の突然死

剖検なし……………広義

剖検したが死因不明……………狭義

(真のSIDS)

(対象 2週間以上～2才未満の児)

拝啓

厚生省、乳幼児突然死の疫学調査につきましては、さきに昭和56年度佐賀・福岡両県医師会の御協力をたまわり、おかげさまだ下記のような成果をあげることができました。

(その結果はすでに会員の皆さまにも御報告しております。)

1. 両県下で、SIDS (狭義のものを含む) が確実に発生している。
2. 頻度は広義のSIDSで1万人あたり1.1～0.2人である。
3. 未熟児では広義のSIDSが上記の頻度の10倍発生している。
4. SIDSへの関心が医師、世間とも高まってきている。

今回SIDSの頻度を正確に知り、発生要因又は危険因子の分析をするために再度59、60、61年の3年間、前むきの疫学調査 (モニターリング) を計画いたしました。全例をもれなく報告調査したいと思いますので、医師会会員の御協力をたまわりますようお願い申し上げます。

方法につきましては (福大法医教授は決定しだい依頼の予定)、担当の方に御相談申し上げるつもりです。とくに今回は、救急センター、プライマリケアの場の先生方すべてにモニターリングポストとなっただき報告をうけるとともに、法医の先生方の御協力のもと司法例を網羅して頻度を出す予定です。

疫学研究班の研究組織はつぎのとうりです。

臨床 1. 山下文雄 (分担研究者) 久留米大学医学部小児科教授

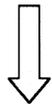
(〒830久留米市旭町67久留米大学医学部小児科 TEL0942-35-3311 内359)

- 2. 田 崎 考 (研究協力者) 佐賀医科大学小児科助教授
- 3. 白 幡 聡 (同上) 産業医科大学小児科助教授
- 4. 福 重 淳一郎 (同上) 九州大学医学部小児科講師
- 5. 村 松 和 彦 (同上) 福岡大学医学部小児科講師

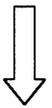
疫学

- 1. 吉 村 健 清 産業医科大学臨床疫学教授
- 2. 斉 藤 友 博 産業医科大学医療技術短大教授
- 3. 辻 力 佐賀医科大学法医学教授
- 4. 古 屋 義 人 産業医科大学法医学教授
- 5. 永 田 武 明 福岡大学法医学教授
- 6. 原 三 郎 久留米大学法医学教授





**検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用  
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



研究目的

1. 北部九州における SIDS 剖検例の検討
2. 死亡統計からみた乳幼児突然死の実態
3. 福岡・佐賀両県下における疫学調査